

ケアするひとの道徳的な責務

——ノディングズのケアの倫理の観点から——

小川 雄

はじめに

本論文の目的は、ネル・ノディングズ (Nel Noddings, 1929 -) の主著 *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education* ⁽¹⁾ に照準を絞り、ケアするひとの責務にかんして、その内実を露わにしなが、それを履行するための方法を明らかにするところにある。

ノディングズは、ケアを、その語義に従って、つぎのように規定している。「ケアするということは、負荷がかかっているこころの状態、言い換えれば、なにごとかやだれかについて心配したり懸念したり、あるいは、気づかっていたりしている状態である」(Caring 9, 2003)、と。この述定からわかるように、ノディングズの言うケアは、気にかけているというわたしたちのこころのあり様を指している。具体的に言えば、こうである。ノディングズに倣って、「ある生き物が、狂乱して、のたうち回ったり呻いたり喘いだりしている」(Caring 2003, 150) としよう。すると、「わたしたちは、苦痛のそのような表出に應えて、同情的な心痛 (sympathetic twinge) を感じる」(Caring 2003,

150)。この述定からわかるように、気にかけることとしてのケアは、たとえば、苦しんでいるひとを目の当たりにしてその様子を忍びなく思うように、ほかのひとの一定の思いにたいして共感的に寄り添うことである。

ノディングズのケアの倫理は、このような態度に従ってふるまうことを道徳的なあり方の範型として打ちだす枠組みである。すなわち、「ケアの倫理は、道徳性を、主として、ケアするひとが行為する前の意識の状態に位置づける」(Caring 28, 2003)。この述定からうかがえるように、ノディングズは、ケアの見地に立ちながら、わたしたちのふるまい方が道徳的であるかどうかを決める要因として、その行為者の動機に着目している。道徳性にこのような仕方接近しながら、「ケアの倫理は、つねに、わたしたちの人間的な直観と感情を捕捉しようと奮闘している」(Caring 151, 2003)。実際、わたしたちにはあるふるまいの道徳的な特徴を動機から捉えようとする傾向がある。たとえば、評判を高めたいというような自己中心的な動機だけに基づいて慈善的な活動に勤しむひとがいるでしょう。一般的に言って、わたしたちは、そのひとの取り組みを手放しでは称賛しない。ことによると、困窮しているひとの苦しみを顧慮していない偽善的な行為であるとして、当のひとを非難しさえするかもしれない。道徳性にかんずるこのような日常的な理解をケアという視点から精確に捉えなおすことが、ノディングズのケアの倫理のもくろみである。

とはいうものの、動機から道徳性に迫ろうとする枠組みは、困難に直面する。わたしたちがある問題を抱えているひとに手を差し伸べようとしているとしよう。そのような場合に、わたしたちが、もっぱら自身の内面しか顧慮せず、その問題の性質とかそのひとの事情とかを無視してしまったとすれば、わたしたちの援助は、失敗してしまうにちがいない。常識的な観点からすると、このような軽率な行動は、もちろん、是認できない。しかしながら、動機を重要視する倫理的な理説は、つぎのような不合理な結果を導くように思える。すなわち、たとえ周りを顧みないまま盲目的にある行為に突き進んだとしても、動機さえ正しければ、そのふるまいは道徳的に正しい、と。

うえの考察から見るとれるように、わたしたちは、動機だけではなく周囲の状況のような客観的な要素も勘案しながら、道徳性を判断している。このような常識的な発想は、ノディングズの準拠する枠組みにたいして、つぎの問いを突きつける。動機という行為者の内面に道徳性を求める発想は、いったい、どのようにして、こころの外にある世界と接触を保てるのであろうか、と。この問題を切り抜けられなければ、ノディングズのケアの倫理は、道徳性にかんする日常的な理解を把握するという目的を達成できない。それでは、ノディングズは、うえの問いにたいして、どのように応答するのであろうか。その答えを見定めなければならない。

そこで、本論文は、まず、ノディングズの事例に基づきながら、ケアという営みの実際を露わにする。そこで明らかになるのは、情愛のような個人的な情感に従ってふるまいながらも周囲の状況を冷静に把握しようとするという、ケアするひとのあり様である。つぎに、ケアするひとがなぜそのように冷静さを保っていられるのかを、「わたしはなにごとかをしなければならない」(Caring 150, 2003) という義務的な心情の見地から解き明かす。しかし、その過程で、当の「しなければならぬ」という思いには絶対的な拘束力がないとわかる。すなわち、ケア「しなければならぬ」にもかかわらずそうしたくないという状況が立ち現れてくる。さいごに、その状況のなかでわたしたちがケアするひとの方へと傾くための方途を、「最善の自己」(Caring 80, 2003) という観点から究明する。

第1節 ケアするひとの動機

ノディングズに倣って、つぎのような事例を考えてみよう。すなわち、「わたしたちと息子がともに価値があると判断している活動に息子を従事させるために、息子が学校を休むことに許可を与える」(Caring 56, 2003) としよう。

とはいえ、この学校は、忌引きと病気以外の理由で欠席した生徒にたいしては、放課後の居残りという罰を課している。というのは、その学校は州の基金に依存しており、その基金は、忌引きと病気以外の欠席を認めていないからである (Caring 56, 2003)。それでは、学校側にこどもの欠席の理由を正直に告げるべきであろうか。ノディングズはこう主張する。「わたしは、原則にあわせるひとであるよりは、むしろ、ケアするひととして息子に接するために、まんまと嘘をつくことを選ぶかもしれない」(Caring 57, 2003) と。この言説が露わにしているように、ケアするひととしての母親は、息子というケアされるひとのためであれば、虚偽の報告も辞さない。すなわち、ノディングズは、つぎの点を認めている。ケアするひとは、ケアされるひとの利益に適うのであれば、嘘をついてもよい、と。しかも、ノディングズによれば、「わたしたちは、愛しているから、ケアする」(Caring 46, 2003)。だから、ケアするひととしてあるくだんの母親は、息子への情愛のような個人的な心情から嘘をつこうとしている。すると、ノディングズのうへの主張にたいしては、つぎのような疑問が浮上してくる。息子のために虚偽の報告をするという選択は、たんなるわが子かわいさゆえの身勝手なふるまいではないのか、と。

とはいうものの、うへの事例を学校の側から見れば、つぎの点を指摘できる。すなわち、忌引きや病気以外の理由で欠席した生徒がいると、州が基金を減額してしまうので、学校にとつては、嘘かどうかに関わりなく、病気で欠席するという報告を聞くほうが好都合である、と。この事情を汲んで、ノディングズは、つぎのように述べている。「学校は、むしろ、わたしの息子が病気であったと聞きたがっている」(Caring 57, 2003) と。だから、うへの事例の母親は、学校の存在を完全に無視し、息子にたいする愛情だけに依拠して、嘘をつくという判断を下しはしない。すなわち、その結論に至る過程は、もうひとりの関係者である学校にどのような影響をもたらすのかという検討も含み込んでいる。ノディングズは、この点を、つぎのように述べて際立たせている。「行為することにたいするわたし

たちの理由は、つぎの二つの両方に関与していなければならぬ。すなわち、ほかのひとの願望や欲求と、問題を含んでいるそのひとの状況にかかわる客観的な諸要素である」(Caring 24, 2003)。¹⁾と。このように、ケアするひととは、個人的な情感に付き従っていないながらも、ケアされるひとのために採る行為が周りに及ぼす影響も勘案しながら、実際にそれを行うのかどうかを冷静に見定めようとしている。

その一方で、「わたしたちは、しばしば、親がわが子の「ために生きている」と語るのを聞く」(Caring 33, 2003)。すなわち、親は、わが子を深くケアするあまり、その子どもの窮状にこころを奪われて、周りが見えなくなりがちである。うえの事例で言えば、息子は、保護者の側からすると、有意義な活動のために罰を受けるかもしれないという理不尽な状況に巻き込まれている。すると、息子をこころから心配する母親は、その子どもの境遇を思いやるなかで、学校の規則にたいして「目の前が真っ赤になる」(Caring 139, 2003)ほどの激しい怒りを覚えるかもしれない。このような激情に絡みとられてしまえば、ノディングズの指摘にもあるように、母親は、「ケアされるひとを助けるというよりは、むしろ、傷つけてしまうかもしれない」(Caring 26, 2003)。²⁾こうした言説を踏まえると、ケアするひとには、盲目的な感情に捕らわれて周囲への気配りができなくなってしまうという危険がつきまとう。そこで、つぎのように問わなければならない。いったい、どのようにして、ケアするひとは、この危険を回避して、上述したような冷静な状態を保てるのであろうかと。

ノディングズは、苦境にあるわが子をケアしている母親の心情にかんじて、こう語っている。「わたしはこの子どもと親密に結びついているから、すなわち、わたしはこの子どもを愛しているから、わたしは、あたかもわたし自身の苦痛を取り除きたいと思うように、子どもの苦痛を取り除きたいと思う」(Caring 82, 2003)。³⁾と。すなわち、ケアするひととケアされるひととのあいだに情愛のある親密な結びつきが存立していれば、ケアされるひとが感じている

辛さは、ケアするひとにとっては、もはや他人事ではない。ケアするひとは、ケアされるひとの苦しみにたいして、まるでそれがみずからの痛みであるかのように、その苦痛を取り去りたいという衝動を覚える。ノディングズは、ケアするひとのそのようなこころのありようを、「動機づけの転移」(motivational shift) (Caring 33, 2003) と言いつ表している。たしかに、わたしたちを一定の行為へと駆り立てる活力、別言すれば、「わたしはしたい」(Caring 82, 2003) という衝動が発現するのは、通例、わたしたち自身のためである。しかし、ノディングズの観察に従えば、つねにそうであるわけではない。「わたしを動機づける活力がほかのひとに流れこむ」(Caring 33, 2003) こともある。すなわち、「わたしはしたい」という衝動は、わたしたちがあるひとをケアしているときには、わたしたち自身のためというよりは、むしろ、当のケアされるひとのために生起する。

このような「動機づけの転移」を体験するから、わたしたちは、ケアするひととして、苦境にあるほかのひとに積極的に手を差し伸べられる。うえで引いたノディングズの言説が示しているように、ケアするひとにそのような動機を与えているのは、ケアするひととケアされるひととのあいだの親密な関係に基づく、情愛のような情感である。だから、ケアするひとは、個人的な人間関係が醸成する主観的な情感に突き動かされながら、「わたしはしたい」という思いでケアしている。しかし、ノディングズに従えば、ケアするひとが感じているのは、したいという衝動だけではなない。「たとえば、わたしが椅子に縛りつけられているとして、自由になりたいと死にもぐるいで思うのであれば、わたしは、もがきながらこう言います。「わたしは、なにごとかをしなければならぬ」と」(Caring 82, 2003)。「この事例から伺えるように、わたしたちのこころのなかには、したいという思いに伴って、しなければならぬ」という義務的な感情が生起してくる。すると、ケアするひととしての母親は、わが子が苦境にあると判明したとき、つぎのように感じている。わたしは、この子どもの苦痛を和らげたいし、そのために、なにごとかをしなければ

ならない、と。このような考察を踏まえれば、ケアするひとをケアへと駆り立てている感情は、正確に言えば、「欲求から生まれた「しなければならぬ」」(Caring 82, 2003)である。だから、この義務的な感情に焦点を定めて、さきに提起した問いを追究しなければならない。

第2節 ケアするひとの責務

前節の考察に従えば、くだんの事例の母親は、理不尽な状況に巻き込まれている息子にたいして、その状況から息子を救いだしたいと願いながら、そのためになにごとかをしなければならぬと感じている。それでは、ケアするひととしてのその母親は、具体的にどのようなふうにするのであろうか。母親の行為の動機が周りからの称賛を勝ち取りたいというように利己的であるとすれば、母親は、「わたしたちの信用を手っ取り早く守るであろうやり方」(Caring 24, 2003)に従って行動しようとする。しかし、わたしたちが「ケアされるひとの福利を望む」(Caring 24, 2003)のであれば、わたしたちは、そのようなやり方を忌避する。というのも、周りからの称賛を求めているとき、わたしたちの関心は自身が周囲からどう見えるかという点に集中し、ケアされるひとの必要とかそのひとを取り巻いている状況とかが視界に入らなくなるからである。たとえば、ノディングズに倣って、ある家族がきわめて困窮しているとわたしたちが知ったとしよう(Caring 11, 2003)。わたしたちは、その家族が滞納している家賃を払ったり生活必需品を買い揃えたりできる。しかし、その家族の夫婦は、公言していないだけで、どちらも自立を望んでいたかもしれない。わたしたち自身のことにはかり気をとられているわたしたちは、家族のそのような希望に気がつかない。だから、わたしたちの慈善的な行為は、当の家族にとってはありがた迷惑で見当外れのケアになる公算が高い。

ケアするひとは、「わたしができることについて考えること」(Caring 82, 2003)をはじめ、うへの危険を回避しようとする。すなわち、わたしたちは、そのように考察しながら、みずからのふるまいが周囲にどのような影響を与えるかと、援助しようとしているひとがそのふるまいをこの状況のなかでどう受けとめるかとを慎重に見定める。そのような配慮を経て、目の前のひとにどのようにして手を差し伸べるのかが、ようやく、固まってくる。だから、ノディングズが洞察しているように、「わたしが、「わたしはしなければならぬ」という情感を認めたとすれば、わたしは、ほかのひとへの応答のなかで、わたしがなにをすべきかについて効果的に考えざるをえなくなる」(Caring 171, 2003)。

こうした考察を踏まえると、前節の母親は、ケアするひととしてつぎのようにふるまう。すなわち、息子が理不尽な状況に巻き込まれているという事実の認知を発端にして、母親のこころのなかに、まず、「わたしはしたい」という欲求が生起する。すると、その欲求に伴って、つぎに、「わたしはしなければならぬ」という義務的な感情が立ち現れてくる。母親は、その指令のもとで「なにをすべきか、という理知的な問い」(Caring 166, 2003)を立て、その問いを追究する過程で、息子が必要としていることと学校側の事情とにかんして情報を収集する。このように、ケアするひととしてのこの母親は、欲求から生じた義務的な感情に誘われて、「ある具体的な状況のなかにいる特定の個人に」(Caring 24, 2003) 関心を払いながら、自身のふるまい方を固めている。

ノディングズは、ケアするひとのこのような有り様を、こう言い表している。「ケアするひとは、ケアされるこのひととこの状況にたいして、および、ケアするひと自身とケアされるひとによって企図された、予見できる将来にたいして、いまここで責任を担い続けている」(Caring 43, 2003) と。この言説が明瞭にしているように、ケアしたい、別言すると、あるほかのひとにたいしてケアするひととしてありたいと願っているときにわたしたちを感じる義

務は、つぎのような内実をもっている。それは、すなわち、ケアされるひとの必要だけを顧慮するのではなく、それをケアされるひとが巻きこまれていく状況のなかに位置づけることである。ケアするひととしてこの責務を果たすために、うえて見たような仕方ですべきか」と問いかけながら、「わたしたちは、きわめて適切に、合理的で客観的な状態に入る」(Caring 26, 2003)。こうして、ケアするひとは、情愛のような主観的な感情に基づく「わたしはしたい」に突き動かされながらも、「ケアされるひとというほかのひとへの責任」(Caring 40, 2003)を引き受けることで、冷静さを保持できるのである。だから、「わたしはしなければならぬ」という義務的な感情に付き従うかぎり、ケアするひとは、「盲目的な心情から応答しない」(Caring 171, 2003)。

しかし、わたしたちがこのように綿密な考慮を経てケアするひととしてふるまったとしても、ケアされている側は、わたしたちがケアしているとは思っていないかもしれない。たとえば、ノディングズも述べているように、わたしたちのケアにたいして、相手から「あなたは実際にはケアしていないよ」(Caring 38, 2003) という否定的な答えが返ってくる場合がある。このような場合、わたしたちがほんとうにそのひとのためになにかしたいと思っているのであれば、わたしたちは、ケアするひととして担っている責務を果たせてはいない。だから、「わたしは、依然として、ケアされるひとのために一定のことをしなければならぬ」(Caring 38, 2003)。このように、ケアは、ケアするひとの側からの一方的な営みではない。むしろ、その営みは、ケアされる側がケアを受け入れたときによく完成する、双方向的な営みである。ノディングズは、ケアがこのように成就したときの状態を、「ケアリング」(caring) (Caring 68, 2003) ということばで際立たせている。このことばを借りれば、ケアするひとの責務を、こう述べ直せる。すなわち、わたしたちは、ケアするひととして、あるほかのひととともに「ケアリング」を成立させなければならぬ、と。

これまで述べてきたように、ケアするひとは、「わたしはしなければならぬ」という義務的な感情のもとで、「ケアリング」の樹立を目指している。しかしながら、ノディングズに従えば、わたしたちはいつでもこのようにケアするひととしてふるまえるわけではない。すなわち、「わたしは、たとえ最初の「わたしはしなければならぬ」を感じとったとしても、それを拒絶するかもしれない」(Caring 81, 2003)。たとえば、ある母親がわが子の夜泣きに気がついたとしよう。通例、母親は、その子どもの辛さを和らげたいと思い、そのために、なにごとかをしなければならぬと感じる。しかし、そう感じると同時に、母親のこころのなかに、子どもの泣き叫ぶ声にたいする煩わしさが湧き上がってくるかもしれない。そのような場合、母親は、「わたしはしなければならぬ」を無視して、子どもの泣き声が聞こえないところへと逃げられもする。このように、わたしたちがケアするひととして感じる義務的な感情には、絶対的な拘束力がない。だから、わたしたちがケアしたくないと思えば、わたしたちは、その内的な命令に逆らうこともできる。ノディングズは、ケアにたいして否定的な思いを抱いているわたしたちを想定しながら、こう問いかけている。「わたしには、「わたしはしなければならぬ」を受諾する責務があるのか」(Caring 81, 2003)と。

第3節 道徳的な欲求

前節の母親のような心理的な状態は、一般化して言えば、「わたしはしなければならぬ——わたしはしたくない」(Caring 80, 2003)という葛藤である。ノディングズは、このように相反するふたつの心情のあいだで揺れ動いているわたしたちにたいして、こう申し立てている。わたしたちは、「しなければならぬ」という呼び声から逃れたいと思っていたとしても、その命令を受託するよう「義務づけられている」(Caring 84, 1984)と。しかし、なぜ、こ

のように断定できるのであろうか。

ノディングズによれば、わたしたちは、「しなければならぬ」けれどもわたしは「したくない」と感じているとき、わたしたちのころには、「ケアされたりケアしたりしたもろもろの瞬間」(Caring 80, 2003)が蘇っている。言い換えれば、わたしたちが苦境にあるひとを目の当たりにするとき、わたしたちは、その場面とよく似ている、ケアにまつわる自身の記憶を呼び起こしている。すなわち、わたしたちのころのなかには、ほかのひとの窮状に自分が駆けつけてそのひとの役に立ったという「わたしがケアした瞬間」(Caring 80, 2003)が立ち現れる。あるいは、自身が苦しかったときとか辛かったときにだれかがわたしに寄り添ってくれたという「わたしがケアされた瞬間」(Caring 80, 2003)が浮かび上がってくる。もちろん、「わたしが受け入れられていない場合があるし、わたしがほかのひとを受け入れるのに失敗している場合も数多くある」(Caring 49, 2003)。しかし、ノディングズによれば、ケアが上首尾に運び「ケアリング」が成立した瞬間を「わたしたちは、意識的にせよ無意識的にせよ、人間的によい状態として感じとる」(Caring 5, 2003)。こうして、わたしたちがはじめの「しなければならぬ」から逃れようとしても、「最善の自己」からの「べきである」という第二の命令が、わたしたちを拘束するのである。というのも、そうした瞬間の記憶は、そのときの情感を再現するからである。すなわち、相手を助けることができた場面での「万事うまくいっている」(Caring 37, 2003)という感じとか、ほかのひとから必要を満たしてもらったときの「安寧」(Caring 24, 2003)とかである。わたしたちは、「ケアリング」という関わりあいには付随する、こうした肯定的な情感に誘われて、その情感を生起させている当の関係をよいとして捉えるようになる。翻って、目の前のひとに手を差し伸べることにたいして逡巡している現在のわたしたちを省みると、その姿は過去の体験から見てとった望ましいあり様から遠く離れている。逆に言えば、ほかのだれかとともに「ケアリング」を打ちたててきた過去のわたしたちのよう

に、目の前にいる相手にケアするひととして向きあえば、わたしたちは、みずからが認めた申し分のない状態に近づいている。

こうして、ケアするひととしてふるまうことに躊躇しているとき、わたしたちのこころのなかで、そのひとにケアするひととして相対している自分の姿が「最善の自己」としてかたちをとりはじめる。わたしたちに助力を求めている当のひとを冷たく突き放してしまえば、わたしたちは、みずからが思い浮かべている理想の自己のあり方を自らの手で切り崩してしまうことになる。この認知をとおして、わたしたちは、当の描像から、「しなければならぬ」という命令にたいしての「わたしはすべきである」(Caring 82, 2003) という呼びかけを感じとる。

ノディングズは、「わたしはすべきである」という第二の命令について、つぎのように述べている。わたしたちは、「わたしが感じとった命令を受け容れるかもしれないし、拒絶するかもしれない」(Caring 83, 2003)、と。だから、当の命令にかんしても、わたしたちがはじめに感じる「わたしはしなければならぬ」と同じく、絶対的な拘束力はない。わたしたちは、「最善の自己」からの呼びかけである「べきである」を無視して、はじめに聞きとった「しなければならぬ」を黙殺できもする。しかしながら、ノディングズはこう主張する。「わたしたちに道徳的でありたいという強い欲求があれば、わたしたちは、当の命令を拒絶することはないはずである」(Caring 83, 2003)、と。ノディングズに従えば、わたしたちには、わたしたちを「べきである」という命令に従わせるような道徳的な欲求が存在する。この欲求の内実を明らかにするために、ノディングズのつぎの言説に着目しよう。ノディングズはつぎのように語っている。「ケアするひとというわたしたち自身の現実的な描像が、わたしたちを、わたしたちがほかのひとと道徳的に接するように導く」(Caring 5, 2003)、と。この言説が示しているように、ノディングズの理解では、わたしたち自身が描き出すケアするひとというあり方、すなわち、「最善の自己」が、わたしたちの道徳的な指針であ

る。この見方からすると、道徳的でありたいという欲求は、当の描像に近づきたいという思いである。とはいえ、そのような欲求は、いったい、どのようにして、湧きあがってくるのであろうか。

すでに見たように、わたしたちは、これまでに体験した「ケアリング」を呼び起こしながら、わたしたちがケアするひととしてふるまっているあり様を「最善の自己」として描き出している。わたしたちがその描像のとおりになるまで、目の前のひととの「ケアリング」が成就すれば、以前に味わった喜ばしい情感がわたしたちに生じる。この見込みが、当の描像に近づきたいという思いをわたしたちのなかに掻き立てる。というのも、「わたしたちは、わたしたちに喜びをもたらすものとか、なんであれ、喜びそのものとかにしたいして、直接触れたいと思う」(Caring 132, 2003) からである。このように、ノディングズは、過去の「ケアリング」に付随する肯定的な情感から、「最善の自己」に接近したいという道徳的な欲求を引き出そうとする。すなわち、「道徳的でありたい」というこの強い欲求は、関係づけられ関係づけられ続けたいという、いっそう根本的で自然な欲求から反省的に導出される」(Caring 83, 2003)。

しかしながら、うえで述べたような仕方ではケアするひとでありたいという思いがこころのなかに萌してもなお、わたしたちは、その欲求に逆らおうとするかもしれない。たとえば、ノディングズの想定にあるように、苦境にあえてある目の前のひとが「わたしの嫌っているひと」(Caring 83, 2003) であるとしよう。そのような場合、「わたしは、そのひとの必要に応じるべきではないとするあらゆる種類の理由を見つけられもする」(Caring 83-84, 2003)。たとえば、わたしたちは、当のひとの分別のなさを指摘しながら、そのひとの苦境にかんして、それが自業自得であると主張するかもしれない。わたしたちが、そのような理由に傾いて、くだんのひとに手を差し伸べないことを正当化すれば、生起してきた道徳的な欲求は、立ち消えてしまう。だから、ノディングズも認めているように、「最善の自己」

へと近づくためには、「わたしは正当化を一時的に脇におかなければならない」(Caring 84, 2003)。とはいえ、どうすれば、正当化を中止できるのであるか。その方法を詳らかにしなければならぬ。

第4節 正当化を断念するための方略

ノディングズは、*The Challenge to Care in Schools: an Alternative Approach to Education*^②のなかで、自身の学生生活振り返りながら、彼女が高校生に出会った教師からの影響をこう述懐している。「この先生は、わたしが数学の教師を志す理由であった」(CCS 106, 2005)、と。すなわち、ノディングズの学問的な関心に応えたり彼女が必要としている知識を提供できたりする有能な教師との関わりの中で、ノディングズは、数学の教師への道を切り開いていった。別言すれば、ノディングズがケアされるひととして当の教師と築いた「ケアリング」が、彼女を数学の教師として育んだのである。この事例が示しているように、わたしたちがこれまで参画してきた「ケアリング」のなかには、わたしたちの生き方に深く関わる結びつきがある。この点を、ノディングズは、つぎのように言い表している。「わたしは、本来的にある関係のなかにいて、その関係から、育ちと導きを引き出す」(Caring 51, 2003)、と。

高校に入ってある教師から数学を習い、その教授を契機として数学の教師を志すという成り行きは、当時のノディングズにとつては、予期しなかった進路であったにちがいない。この事例を敷衍して言えば、わたしたちの人生を左右する「ケアリング」をわたしたちがだれと築き上げるのかは、ほとんどの場合、わたしたちの意図のもとであらかじめ決まっているわけではない。それは、むしろ、偶然的であり、ノディングズのことを借りれば、「出会い」(encounter) (Caring xiii, 2003) である。実際、わたしたちは、人生に多大な影響をもたらす親という存在にかんし

て、それをだれにするかを任意に選択できない。

うえの考察に従えば、わたしたちがこうして存在しているのは、「ケアリング」という偶然のおかげである。この把握を踏まえて、あるひとがそのひとの愚かしさから苦しみに喘いでいるという状況を考えてみよう。なるほど、そのひとの境遇は、当人の愚かさが招いたのであり、分別のあるわたしたちであれば、たやすく回避できるかもしれない。しかし、わたしたちは、生まれたときから、そのように明敏であったわけではない。わたしたちのそのような長所は、親とか教師とかといった身近なひとびとの「出会い」のなかで、だから、特定のひととの「ケアリング」のなかで漸進的に発達する。たとえば、ノディングズは、つぎのように報告している。「小学校2年生のときの教師は、わたしがよい読み手であることを見出し、散漫なわたしを読書に傾けさせてくれた」(CCS 106, 2005)と。このような事実は、わたしたちをつぎのような思考に導く。すなわち、わたしたちがそうしたひとびとと出会っていないければ、わたしたちは、いま苦境にあるそのひとのように、分別のなさから窮地に直面していたかもしれない。ノディングズは、この考えの基底にある発想を、つぎのように述べて際立たせている。「わたしは、当のほかのひとの真相をわたし自身にとつての可能性としてみなさざるをえなくなる」(Caring 14, 2003)と。このようにわたしたちがその愚かなひとであったかもしれないと認めるとき、わたしたちにとつては、このひとが苦境にあるという現在の状況を当人の責に帰すことは、もはや、できなくなる。というのも、その事態を招いた愚かさは、わたしたちにも備わっていたかもしれないという点で、当のほかのひとに固有の特質ではないからである。

すでに確認したように、「最善の自己」をかたちづくる過程で、わたしたちは、「ケアリング」にかんする過去の記憶を思い起こしている。そのような想起のなかで上述のようにわたしたちの現在のあり様を「ケアリング」の観点から省みれば、わたしたちは、窮状を訴えているあるひとにかんして、その責めを当人に負わせることはできない。す

ると、当のひとを援助しないという理由としてそのひとの有責性を持ち出すという正当化は、断念せざるをえない。かくして、このような仕方では正当化を取りやめて、ようやく、前節で露わにした、「最善の自己」に近づきたいという道徳的な欲求に身を委ねながら、「わたしは、猜疑心と反感と無感動という雲をつきぬけて、ほかのひとにたいする奮闘に参与できる」(Caring 50, 2003)。

おわりに

本論文では、感情的な動機からケアするひとが理知的でいられる理由を解き明かしながら、ケアするひとがなをしなければならぬのかを具体的に析出させて、その責務をまつとうするためには二つの手立てが必要であることを示した。すなわち、道徳的な欲求の喚起と正当化の断念である。

たしかに、ノディングズのケアの倫理は、ケアするひとの態度のなかに道徳性を見とろうとする枠組みであるので、周囲の状況のような、行為者の内面の外にある客観的な情報を道徳性の判断に組み込みにくいように思える。そのような困難がほんとうに当の理説に存在するかどうかを、これまでの考察を踏まえながら、母親が赤ん坊の夜泣きに気がついたという事例のなかで確認してみよう。

この事例の場合、ノディングズに従えば、母親は、その子どもへの憐憫を覚えながら、「わたしはなにごとかをしなければならぬ」(Caring 150, 2003) という情感を覚える。その情感は、母親がケアするひととして抱いている、その子どもの苦痛を和らげてあげたいという欲求に基づいている。だから、当の情感が母親に要求しているのは、精確に言えば、赤ん坊の辛さを緩和するためになにごとかをすることである。しかし、母親は、赤ん坊がなぜ泣いてい

るのがわからない。そのような乏しい知識のままに行動してしまえば、子どもをかえって苦しめるかもしれない。そこで、母親は、「痛いのかな」やそれに類することを赤ちゃんことばで語りかける」(Caring 31, 2003)。もちろん、赤ん坊からの言語的な応答は期待できない。むしろ、「当の問いかけとか声色とかが、注意深く静かに赤ん坊を見守るようわたしたちを促す」(Caring 31, 2003)。このように、「わたしはしなければならぬ」に付き従っている母親は、まず、赤ん坊に声をかけながらその子どもの反応を注視して、どこが悪いのかを冷静に見定めようとする。なるほど、母親は、そのような慎重な観察をせずになんらかの行動をとれもする。とはいえ、そのふるまいは、母親が感じとった「わたしはしなければならぬ」からの要求に反している。というのも、赤ん坊の泣いている理由がまったくわからない状態でふるまうことは、その子どもの苦痛を増大させるという危険をあえて冒しているからである。だから、その行動は、「わたしはしなければならぬ」という動機に根差していないふるまい方である。

うへの解析から見るとれるように、「わたしはしなければならぬ」という内的な命令は、赤ん坊の様子のような、意識の外側にあるもろもろの情報へとわたしたちを導いている。すなわち、ノディングズのケアの倫理は、道徳性にかんして行為者の動機を強調するけれども、意識という内面に閉じずに、むしろ、世界へと開いていく。この特質に鑑みれば、ノディングズの枠組みのなかには、上述の困難は存在しないと言わなければならない。すなわち、ケアするひとは、「わたしはしなければならぬ」というそのひとに特有の意識の状態を経由して、容易に、周囲の状況にかんする事実を収集できる。

このように、ノディングズのケアの倫理は、動機と事実という、道徳性を判断するさいにわたしたちが日常的に依拠している二つの要素を、ケアという概念のもとで統合している。しかし、この理説は、道徳的な実践を解析するための準拠枠を提供しているだけではない。本論文の考究に基づけば、ノディングズの探究の射程は、なにがわたした

ちを道徳的な行為者へと押し上げるのかの解明にまで及んでいる。それは、すなわち、ケアするひとでありたいという道徳的な欲求と正当化の中断である。ノディングズのケアの理論を教育方法論に応用する文献がこれまで主題的に取り扱ってきたのは、前者のケアするひとでありたいという思いであった。たとえば、梁貞模は、つぎのように述べている。「このようにしてケアリングの教育は、判断や推論ではなく、まずは他者に対する敏感な感受性やケアしたいという自然欲求、そしてケアするひとでありたいという倫理的理想を中心として展開される」⁽³⁾。しかし、後者の正当化の中断にかんしては、管見のかぎりでは、言及がない。たしかに、正当化の中断の主な役割は、道徳的な欲求を阻害する要因の除去にあるから、それ自体には積極的な意義がないように思える。とはいえ、わたしたちは、正当化の中断を閑却してはならない。というのも、その過程で獲得できる「ほかのひとの実相がわたしにとっての本当の可能性になる」(Caring 14, 2003) という体験は、あるひとの苦境を当人の責任に帰す自己責任論を解体させるからである。すなわち、あるひとの窮状にかんじてわたしたちもそうなっていたかもしれないと気づくことができれば、わたしたちは、自己責任論を振りかざすことはもはやできなくなる。この論点の究明を残された課題としたい。

註

- (1) Nel Noddings, *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education 2nd ed.*, 1984, Berkley: University of California Press, 2003. 本著作からの引用と参照にかんしては、著作名を *Caring* と略記し、該当頁と出版年を併記する。
- (2) Nel Noddings, *The Challenge to Care in Schools: an Alternative Approach to Education 2nd ed.*, 1992, NY: Teachers College Press, 2005. 本著作からの引用と参照にかんしては、著作名を *CCS* と略記し、該当頁と出版年を併記する。
- (3) 梁貞模「ケアリングの倫理と道徳教育の方法」(林泰成編『ケアする心を育む道徳教育——伝統的な倫理学を超えて』北大路書房、二〇〇〇年)、七六頁。